

日本学術会議 地球惑星科学委員会 SCOR 分科会
第 25 期・第 5 回議事要旨

日時： 令和 4 年 8 月 22 日（月） 14:00-16:00

場所： Zoom による遠隔会議

<https://u-tokyo-ac->

[jp.zoom.us/j/85872531301?pwd=cDdEaEdwVkNHT0xtd3VzR3Q2ZHAwZz09](https://u-tokyo-ac-jp.zoom.us/j/85872531301?pwd=cDdEaEdwVkNHT0xtd3VzR3Q2ZHAwZz09)

ミーティング ID: 858 7253 1301

パスコード: 135565

出席者：, 植松光夫, 沖野郷子, 川口慎介, 齋藤文紀, 張勁, 新野宏, 花輪公雄, 原田尚美, 日比谷紀之, 山形俊男, 渡邊良朗（以上連携会員, 五十音順）, 青山道夫, 野村大樹, 升本順夫（以上特任連携会員, 五十音順）

欠席者：西弘嗣, 古谷研（以上会員, 五十音順）窪川かおる, 白山義久, 益田晴恵,（以上連携会員, 五十音順）

議題

0. 第 4 回議事録確認

報告事項

1. カーボンニュートラル(ネットゼロ)に関する連絡会議について

審議事項

1. 2022SCOR ワーキンググループプロポーザルの審査結果について

2. 有人潜水船の未来を語るシンポジウムの開催について

3. その他

配布資料

資料 1 地球惑星科学委員会 SCOR 分科会（第 25 期・第 4 回）議事要旨

資料 2 カーボンニュートラル(ネットゼロ)に関する連絡会議資料

資料 3 2022SCOR ワーキンググループプロポーザルの審査結果

資料 4 有人潜水船の未来を語るシンポジウムの開催について

資料 5 第 25 期における意志の表出の案の提出期限等について

議事

1. 前回議事要旨案(資料 1)を確認し, 承認された。

2. 原田委員長から, 資料 2 に基づき, 6 月 21 日に行われたカーボンニュートラル(ネットゼロ)に関する連絡会の概要報告と配付資料(資料 2)の説明があった。今回の会合は各省庁の対応に対する質疑応答が主だったことが報告された。SCOR 分科会としては,

今後同連絡会に出席し、関連課題があれば随時分科会で取り上げていくこととした。

3. 張副委員長の進行で、資料3に基づき、2022年度新規 SCOR ワーキンググループ申請書の評価を行った。今回は7件の申請があり、各件につき5~6人の分科会委員が評価表に記入する形で評価(資料3)およびコメント(当日配布資料)を事前に提出した。案件につき、各査読担当者が意見を述べたのち、全体の審議を行い No.1 (Towards best practices for Measuring and Archiving Stable Isotopes in Seawater : MASIS) , 2 (Developing resources for the study of Methylated Sulfur compound cycling PROCesses in the ocean: DMS-PRO) , 4 (Reducing Uncertainty in Soluble aerosol Trace Element Deposition: RUSTED) を Must fund, No.6 (DYNamic Approaches for assessing Marine biota responses to fluctuating Oceans: DYNAMO) を May fund, No. 3 (Foraminifera in Extreme and Rapidly Changing Environments: FIERCE) , 5 (DEveloping Repositories for carbon FLUX quantification: Th-234 as a case study: DEPOFLUX) , 7 (Impact of biotoxins on marine apex predators in Upwelling Systems: ToxMAP) を Do not fund とした。全件について、より良い提案となるよう建設的なコメントを付すこと、特に May fund の提案については再申請を促すコメントを付して、日本 SCOR として8月末に事務局に審査結果を報告する。コメント文については、原田委員長と張副委員長に一任することで合意した。

審査終了後に以下の点について意見交換を行った。各国の審査方法は様々であるが、本分科会のような委員会合議が望ましく、また日本がこの方式をとっていることは周知されている。日本人がメンバーとして参画している提案は7件中4件で過去最高であるが、コミュニティの規模や拠出金額から考えると、より多くの日本人研究者が加わることが期待される。今年は化学系が多いという分野の偏りが指摘されたが、年によって偏りも変化し、継続的な傾向ではない。

4. 有人潜水船の未来を語るシンポジウムの開催について、資料4に基づき提案者の川口委員から背景と論点の説明があった。コミュニティの意見を広く集めるためのシンポジウムが必要である、学会等の集会・セッションで有人潜水の科学的意義を明確にすることが重要である、科学者の立場だけでなく国民の支持を集めることが同時に重要である、有人潜水に関する技術力を維持することが国力につながる、等の意見が交換された。議論の結果、JpGU のパブリックセッション等の学会活動を通じてコミュニティの意見を聴取すること、その後今期中に SCOR 分科会主催でシンポジウムを開催することで合意した。
5. 原田委員長から、資料5に基づき第25期における意志の表出の案の提出期限等について説明があった。現在の準備状況と提出期限を考慮し、今期の意見の表出は行わないこととした。上記項目4で議論した有人潜水船の未来を語るシンポジウムについても、報告を意志の表出の形ではなく、「学術の動向」にまとめを掲載するものとする。
6. その他として、以下の2点が挙げられた。

- 渡邊委員から、G サイエンス学術会議共同声明の内容について、内容の一部は SCOR 分科会と関連が深く、声明を国内で具体化することについて SCOR 分科会内部で認識を共有すべきではないかとの提案があった。原田委員長から、海洋関係は連続して主要テーマの1つになっており、次回議長国が日本であることも考え、次回の議事として準備する旨の発言があった。
- 植松委員から、9月23日開催の公開シンポジウム「沿岸環境の変化と人間活動-10年後を見据えた課題と対応-」について紹介があった。